［ＳＴＥＰ１８］　～定位置を考えよう～

［図５］

下段	□□□□□	ⓐ	□□□□
中段	□□□□		□□□□
上段	□□□□		□□□□
上段		□□□□□□□□□□	
中段	□		□□□
下段	□□□□□	ⓑ	□□□□□□

まず、［図５］を見てほしい。ⓐ・ⓑともに２５枚の札を並べた時の図である。ⓐさんは右と左の各段に両端から数枚ずつ並べている。ⓑさんも中段と下段は左右ともに両端から並べている。これは、払い手が札の取り方の主流だと説明したことと関連している。両端に札を並べたほうが、払いやすいし札押しの時に札を外に押し出しやすいからである。したがって、ⓐさんのような並べ方は結構多い。また、ⓑさんの並べ方は、上段中央を利用する並べ方である。ⓑさんの場合には、上段中央の札を突き手で取ろうという意図がうかがえる。中段中央や下段中央は、他の札を取りに行く時に邪魔になるため、置かない人がほとんどである。このようなわけで、自分の定位置を決める時には、右下段・左下段・右中段・左中段・右上段・左上段・上段中央の七箇所、または上段中央を除いた六箇所（左上段の左端には札を置かず五箇所・六箇所という人も中にはいる）に札を分散させて置くことになる。

並べ方には特に決まりというものはない。しかし、　一般的には上の句並べを採用している競技者が多い。同音の札を一箇所にまとめて置く人もいれば、二箇所・三箇所と別けて置く人もいる（「あ札」「な札」「わ札」「お札」などは特に数箇所に別けることが多い）。また、とも札を並べて置く人もいれば、離して置く人もいる。これは、自分で取りながら考え、工夫していけばよいことである。あと一般的なことを少々つけ加えておくと、一字決まりは下段に置くことが多く、大山札は囲いやすいところに置くことが多いということくらいであろう。

定位置を決める際に考えてほしいことは、自分に取りやすい定位置は相手にも取りやすいということである（同音を一箇所にまとめて置くと自分も覚えやすいかわりに相手からも攻められやすい）。相手に取りにくく、自分に取りやすい定位置がベストといえるだろう。ただ、自分の定位置は、最初取りにくくても次第に慣れてくるということは確かである。とりあえず定位置を決めたら、あとは徐々に練習の中で修正していくことをおすすめする。

定位置は、自分のかるたの取り方などとも関連してくる。他人の定位置なども研究してこれでいいやと思わずに常に工夫を続けてほしい。そして納得がいったら、その定位置を大切にしてほしいと思う。

では、取札を持ってきて、アトランダムに二十五枚取って一通り札を並べることを繰り返し、自分の一応の定位置を決めておこう。一応の定位置が決まったら、次のステップに進もう。

札　音　（１０）

～札は招く～

競技かるたを取っていると、誰しも経験することであるが、次にあの札が出そうだなと感じると本当に出てしまうことがある。一試合に五回六回とあることもあるし、まったくないこともある。実に不思議な感覚である。この「次にあの札が出る」と感じてその札をビシッと取った時の快感はまた格別である。しかし、だからといって狙ってばかりいるようなかるたになっては駄目である。この感覚は、狙ってあてて取ったという感じとは異質である。霊感とかインスピレーションという言葉で言い表わすことができるだろうが、この現象の表現方法は人によっても多種多様で異なる。以下にいくつかの例を記しておこう。

曰く、「札が呼んでいる」「札が手を振る」「札がウインクする」「札が光って見える」「札が合図する」「その札だけ大きく見える」etc.…

真面目に読むとバカバカしいようだが、まさにこのような感じなのである。競技かるたを始められた皆さんも今にこのようなことを体験なさることと思う。

さて、この「札音」のコーナーもこれで最後である。もっといろいろなことを書きたかったが、話の種もそろそろ尽き欠けてきたようである。底をつく前にやめておいたほうがよいだろう。最後に、競技かるたを始めた以上、是非とも自分独自の「札音」を聞き、「札に招かれる」という体験をしてもらいたい。そうすれば、かるたのあらたな一面を見ることができるだろう。

札　音